

研究ノート

教材の開発 —引用(2)—

岡田美穂*1

キーワード：引用、教材の開発、練習問題、初年次教育

1 はじめに

本研究は本学の学生が原文の引用を適切に行いレポートや論文を作成することができるようになるための教材の開発を目的として行ったものである。

論文やレポートを執筆するためには、アカデミック・ライティングスキルを身につける必要があるが、その一般的なルールの1つに引用を適切に行うことが挙げられている(石上・中島 2016)¹⁾。引用の仕方は引用した文章を一重カギ括弧で囲むこと(河野 2018)¹⁰⁾や「著者名(出版年)によると、～～という」、「～～が見られる(著者名, 出版名)」のような引用の型を使って示すことなどが(桑田ほか 2015)⁹⁾さまざまなテキストに示されている(二通・佐藤 1999)¹²⁾、渡邊 2015)¹⁴⁾、松浦ほか 2017)¹³⁾、井下 2019)²⁾、佐渡島ほか 2020)¹¹⁾等)。引用は授業でも注意喚起されているにもかかわらず大きな困難点となり、剽窃が問題となることについては既に多くの指摘がある(大島 2007)⁴⁾、大島 2017)⁵⁾。剽窃とは引用を示さず、あたかも自分の見識であるかのように装ったもので(井下 2019)²⁾、悪気なく行ったことであっても著作権の侵害にあたり、犯罪である(桑田ほか 2015)⁹⁾。

本学の2年生を対象に行った岡田・高橋(2021)⁶⁾でも剽窃にあたる不適切な引用が見られたことが報告されている。当該学生には悪気がなく、それらの引用が剽窃にあたるという意識もなかったという。このような学生に対しては剽窃が著作権の侵害にあたり、犯罪であることを(桑田ほか 2015)⁹⁾繰り返し説明しなければならない。また、本学の学生に合った教材を開発し、引用を適切に行うことができるようになるまで指導す

る必要があると考える。

本研究において本学の学生に合った引用を適切に行うための練習問題が作成され、その後それを用いることで本学の学生が引用を不適切に行うことなく文章を作成することができるようになれば、レポートや論文といった学内における文章作成のみならず、ブログやHPといった学外へ向けての発信活動においても有用であると考えられる。

2 「教材の開発—引用—(岡田・高橋 2021)⁶⁾」の概要

本研究は岡田・高橋(2021)⁶⁾に続くものであるため、その概要を示しておく。岡田・高橋(2021)⁶⁾は本学の学生に共通する不適切に行われた引用の特徴を明らかにすることを目的として行った。2019年度開講の「教育課程論」を履修した2年生14人が書いたレポートから抜き出した引用文を分析の対象とした。レポートの課題は当該授業の担当教員が1995年に執筆した「体育、このすばらしい教科」という資料で述べられている主張に対する自分の考えを原稿用紙800字以内で書くというものであった。その結果、間接引用文は計68であり、その1/3に剽窃にあたる不適切な引用があったという。それらは佐渡島ほか(2020)¹¹⁾が示した原文の表現が変えられたり、原文の語句の順番が入れ替えられたりしたもので次のような2つの特徴が見られた。1つは原文に述べられている著者の主張を学生が「と考える」、「と思う」などを用いて学生自身の意見として書いたもの、もう1つは原文を引用しているにもかかわらず引用の表現を用いずに書いたものである。

*1 至誠館大学 現代社会学部

本研究では4種類の練習問題を作成し、実施した。学生がそれぞれの練習問題でどの程度引用を適切に行うことができるかを調べ、また、引用が不適切であったものについてはその原因を探った。

3 4種類の練習問題

4種類の練習問題は次の通りである。練習問題1は他者の文章を引用して書くものであり、練習問題2は引用した他者の意見と自分の意見とが分かるように明確に区別して書くものである。前者は100字程度、後者は200字程度の文章を作成する。練習問題3は引用元となる資料を読んだ上で練習問題3の文章の不適切に行われている箇所を下線を施し、引用を適切に行つて文を修正するものである。文章は過去に学生が書いた引用が不適切に行われた文を参考に作成した^{註1}。練習問題4は資料2の主張に対する自分の意見を述べた上で自分の意見を補強する他者2人以上の意見を引用し書くものである。タイトルと参考文献を除き600字程度の文章を作成する。他者の意見として引用する著作物は図書またはインターネットを検索するか練習問題2に参考として示した榎本(2020)³を用いても良いとした。榎本(2020)³とは『楽しい授業=良い授業』という勘違いの弊害と危険性・『笑顔の多さ』偏重の風潮について述べたものであり、Business Journalの記事の1つである。

資料1、2については担当教員である筆者がそれぞれの概要を説明した後、学生が各自黙読した。以下、練習問題1~4と資料1、2の一部を示しておく。

練習問題1.

資料1またはインターネットで検索し情報を引用して「しかしながら、」に続く文章を書いてください(100字)。(ヒント:「しかしながら、〇〇()によれば、」)

外国人観光客を呼び込むための施策が行われた。
[中略]その後、京都観光客数が増加した(京都市情報

館2020)。しかしながら、

参考文献

佐渡島沙織ほか(2020)¹⁾『レポート・論文をさらによくなる「引用」ガイド』大修館書店.p36
京都市情報館「令和元年(2019年)京都観光総合調査(概要版)」<https://www.city.kyoto.lg.jp/sankan/page/0000271655.html>(2020.6.17)⁸⁾

図1. 練習問題1

資料1. (抜粋)

京都市民の日常生活にかかせないバスは常に満員で違法民泊業者も増えており、また、京都観光の1つである祇園では今春から夜桜のライトアップが中止となった(木曾2017)⁷⁾。

参考文献

木曾崇 PRESIDENT Online 『訪日客は迷惑』京都を悩ます“観光公害” <https://president.jp/articles/-/22664>(2017.7.26)⁷⁾

図2. 資料1(抜粋)

練習問題2.

資料2を読んで自分の意見を述べてください(200字)。自分の意見を補強するためには他者の意見を示してください。

<参考>榎本博明 Business Journal 『楽しい授業=良い授業』という勘違いの弊害と危険性・『笑顔の多さ』偏重の風潮 https://biz-journal.jp/2020/10/post_187302.html³⁾

図3. 練習問題2

資料2. (抜粋)

体育、このすばらしい教科(1995)^{註2}

新潟市教育委員会 高橋一榮

学校嫌いの原因は多岐にわたる。[中略]教師の立場の見方から、子どもの立場の見方へと変えていく努力をすれば、学校嫌いは減少していだろう。そのためには①教え込みだけの授業を変えること、②

一人一人が活かされる学級集団をつくりあげることが必要となる。

[中略]およそ 20 校を計画訪問したが、多くの授業では「教え込みだけの授業」が見られた。知識や技能をただ教え込むだけでは、一人一人の子どもに学ぶ楽しさを十分に味わわせることは困難である。

体育の授業は「いまある力」からスタートし、その力で十分運動を楽しむことを保障している。[中略]そして、それだけでは終わらせず、十分にその運動を楽しむ段階を、どの子どもにも経験させたのち、さらに子どものニーズも考慮して、より深い楽しみ方を保障しようと意図している。

それぞれの教科や領域の授業で体育の授業のような考え方で[中略]、授業を組織していくならば、子どもたちにとって学校は魅力的なところになるだろうと考える。

図 4. 資料 2 (抜粋)

練習問題 3.

次の文章には正しくない引用(剽窃)の文が含まれています。その箇所には下線を施し、正しい引用の文に直してください。

・では、生徒が楽しいと感じる授業を作ればいいのか。私は生徒が楽しいと感じる授業を作れば、授業のつまらなさが解決できるとは思わない。遊びとは異なった次元の楽しさを、子供が味わうことができるように導いていくべきではないか。私はそう思った。

参考文献

Business Journal 榎本博明 『楽しい授業＝良い授業』という勘違いの弊害と危険性・『笑顔の多さ』偏重の風潮 https://biz-journal.jp/2020/10/post_187302.html(2020.10.31)

図 5. 練習問題 3

練習問題 4.

資料 2 の著者の主張に対する自分の意見を述べてください(600 字)。

・自分の意見を補強するためには他者の意見を 2 つ以上引用すること。600 字とは別にタイトルと参考文献も示すこと。

図 6. 練習問題 4

練習問題 1~4 は 2020 年度開講の初年次学生を対象とする「基礎ゼミⅡ」の第 5 回、第 6 回の計 2 回の授業で実施した。2 回の授業に先立ち、第 4 回の授業ではレポートや論文には何をどう書くか、その構成はどのようなものか、参考文献をどう示すかなどを説明した。第 5 回の授業では自分の意見のみを書いた引用のない文章と他者の意見を引用した文章との違い、引用の表現及び示し方、剽窃などについて説明し、練習問題 1 と 2 を実施した。第 6 回の授業ではレポートや論文に用いる文体、段落内の構成を練習し、引用の示し方及び剽窃について再び説明した後、練習問題 3 を実施し、練習問題 4 を宿題とした。締め切り期限内に提出されたのは 6 人分の文章であった。6 人分の文章から抜き出した引用箇所を分析の対象とし、まず練習問題 1~4 のそれぞれで引用が適切に行われたものの割合を算出した。次に引用が不適切に行われたものについてその原因を考察し、練習問題 1~4 の問題点を示した。

4 結果と考察

練習問題 1 は観光客数が増えた(京都市情報館 2020)⁹⁾一方で観光客によって生じた地域の問題を引用し、100 字程度で記述するものであった。6 人が書いた文章の内原文の引用は計 9 文であり、その内の 7 文が適切に行われたものであった(77.7%)。引用が不適切に行われたものは 2 文であり、それぞれの文は適切な引用文に続く文であった。当該学生は連なった 2 つの文によって原文を引用し表したつもりであったと考えら

れる。前の文は引用を適切に行うことができたが、後ろの文は引用を適切に行うことができなかったのである。具体的には図7のように、1文目には引用であることを示す「○○()によれば、」を伴っているが、2文目には引用であることを示す表現の「という」を伴っていないため不適切な引用となった。つまり、2文で表した原文の引用の2文目が不適切な引用となったのである。

2文から成る原文の引用。1文目は引用を示す著者名(出版年)を伴うが、2文目には引用を示す表現がない。

1文目；○○()によれば、～～ている。
2文目；～～である。

図7. 2文から成る引用の内2文目が不適切なもの

2文目の引用が適切に用いられなかったのはヒントの有無が関係していると考えられる。練習問題1は「しかしながら、」に続く文を1文目として記述するものであった。1文目には学生が著者名と出版年を書き忘れないように「○○()によれば、」とヒントが示されているのに対し、2文目についてはヒントがない。当該学生にとってはヒントが示されていることが返って1文目を引用したという意識が持てないまま2文目を作成することになり引用表現を落とすことになってしまったのだろうと考えられるのである。

練習問題2は他者の意見と自分の意見とが分かるように示すものであった。6人分の引用は計11文であり、その内の9文が適切に行われたものであった(81.8%)。不適切な引用文は2文でそれを書いた学生と先述した練習問題1で不適切な引用文を書いた学生とは異なる。練習問題2で引用が不適切に行われた2つの箇所もそれぞれ2文から成るものであった。2つの箇所の内の1つは図7と同じく1文目の引用は適切に行うことができたが、2文目の引用を適切に行うことができなかった。もう1つは図8に示すように他者の意見を2文

続けて表しており、1文目の引用が適切に行われなかったものである。

2文から成る原文の引用。両文とも引用を示す表現の「という」を伴うが、1文目に必要な著者名(出版年)または図書名等を示す表現がない。

1文目；本来は～～という。
2文目；また、～～であるという。

図8. 2文から成る引用の内1文目が不適切なもの

これらのことから本学の学生にとって引用表現を落とし易いのは2文から成る引用であることが考えられる。当該学生によれば原文の引用を2文にわたって行ったが、2文が続いていることに安心し、一方の引用表現を怠ったということであった。練習問題1、2ではたとえ2文から成る引用が行われた場合であっても両文とも確実に引用を行えるような練習問題の改良が求められる。

練習問題3は引用の不適切な箇所を修正するものであった。4文から成る問題文の内2文目と3文目が榎本(2020)³⁾の引用である。したがって例えば以下のように2文目と3文目を修正しなければならない。2文目には「榎本(2020)と同じく」を加え自分の意見が著者と同じであることを示し、3文目には「榎本(2020)は～という」を用いて修正する。6人は3文目が不適切な引用であることには気がつくことができたが、2文目が不適切であることには気がつくことができなかった。計12文の不適切な引用の内6文のみ正しく修正したことになる(50%)。練習問題3の正答率が低いことから練習問題1～3の中ではこの問題が最も難しい問題であることが分かる。

6人全員が2文目が不適切な引用であることに気がつかなかったのは、文頭に「私は」文末に「思わない」という自分の意見を表す表現が用いられているからであると考えられる。6人は原文を読んだ上で練習問題3を解いたにもかかわらず、自分の考えや意見を表す表現

が用いられていることから、文の表す内容が引用であると見抜くことができなかつたのである。岡田・高橋(2021)⁶⁾では学生の不適切な引用文に自分の考えや意見を表す表現が用いられていた。練習問題3はそのような剽窃を防ぐための問題として不十分であると言える。練習問題3は例えば不適切な引用箇所の数を予め述べておくか、あるいは自分の意見を述べる表現形式を用いて2つ以上の不適切な引用文を作成するといった改良が求められる。

練習問題4では資料2の主張に対する自分の意見を述べた上で自分の意見を補強する他者の意見を2つ示すものであった。6人は自分の意見を補強するための他者の意見として1つは榎本(2020)³⁾を、もう1つはインターネットを検索して得た情報を引用した。6人分の引用は計33文であり、その内の26文が適切な引用であった(77.8%)。26の引用文は概ね資料2の著者及び榎本(2020)³⁾の主張を記述したものであった。それに対し、引用が不適切であった7文の内5文は資料2及び榎本(2020)³⁾以外のもので各自がインターネットで検索した情報を伴う文であった。引用が不適切であった文は他者の意見であるにもかかわらず、岡田・高橋(2021)⁶⁾の2年生と同様に「と考える」や「と思う」を用い自分の意見としていた。5文の内2文を書いた学生にその理由を尋ねてみると必要な情報を検索し続け、ようやく辿りつき、参考文献を示した段階で安心して文章中に引用を示すのを忘れてしまったということであった。残りの3つの文については当該学生2人によれば参考文献には引用元を示したが、文章中に引用であることを表すのが面倒であったので省略したということであった。つまり、3人は練習問題2、3で用いた資料1及び榎本(2020)³⁾については引用を適切に行ったのに対し、それぞれが検索して得た情報については引用を適切に行わなかつたということである。

これらのことから練習問題4も改良が求められる。例えば検索して得たインターネットの情報を引用する場合には引用するページの添付を義務化することであ

る。そして、学生が文章の中に引用を示すのを忘れないように、かつ学生が引用を面倒に思い省略しないようにするためには、引用を自動的に行うことができるようになるまで繰り返し練習を行わなければならないが、このことは今後の課題となる。どの程度繰り返し練習を行えば引用の習慣が身につくのかはまだ分からないが、少なくとも今回実施した練習問題4問を改良の上、今後新たな練習問題を加える必要があるだろうと考える。

5 まとめと今後の課題

本研究では「基礎ゼミⅡ」の授業で4種類の練習問題を実施し、初年次の学生6人がどの程度引用を適切に行うことができるかを調べた。また、引用が不適切であった箇所についてはその原因を探った。練習問題1は他者の文章を引用して書くもの、練習問題2は引用した他者の意見と自分の意見を書くもの、練習問題3は引用が不適切である箇所に下線を施し文を修正するもの、練習問題4は資料2の主張に対し自分の意見を述べ、それを補強する他者2人以上を引用し書くものであった。6人分の文章から引用箇所を抜き出し分析の対象とした。

練習問題の4問はそれぞれのテーマ、記述内容、記述方式、文字数等異なるものであったが、引用が適切に行われた割合は練習問題1では77.7%、練習問題2では81.8%であった。引用表現を落とし易いのは2文から成る引用の内1文であることが分かった。2文から成る引用を確実にすることができるようになるためには今後練習問題1、2の改良が求められる。引用が不適切な箇所に下線を施し修正する練習問題3の正答率は最も低く50%であった。自分の意見を述べる表現を伴う文であっても引用であるか否かを見抜く力を養うためには例えば不適切な引用箇所の数を予め知らせるか、あるいは自分の意見を述べる表現形式を用いて2つ以上の不適切な引用文を作成するといった問題文の改良が求められる。練習問題4では引用が適切に行

われたのは 78.7%であった。不適切な引用 7 文の内 5 文については岡田・高橋(2021)⁶⁾の 2 年生と同様に「と考える」や「と思う」が用いられていた。不適切な引用を防ぐための改良点としてインターネットからの情報の別紙添付が考えられた。不適切な引用を行った学生は繰り返し練習を行えば引用を行う習慣が身につくのか、もしも引用の習慣が身につくとすれば一体どのくらいの期間繰り返し練習を行えば良いのかなどについては今後の課題となる。

[註]

・註 1：学生が書いた文章を参考に練習問題 3 として用いることについては当該学生の許可を得ている。

・註 2：資料の出典は以下の通りである。

高橋一榮(1995)「体育、このすばらしい教科」『新潟市教育委員会月報』3月号, 31-34

[引用文献]

- 1) 石上浩美・中島由佳(編著) (2016) 『キャリア・プランニング大学初年次からのキャリアワークブック』ナカニシヤ出版, 65-66
- 2) 井下千以子 (2019) 『思考を鍛えるレポート・論文作成法[第 3 版]』慶應義塾大学出版会, 31-34
- 3) 榎本博明 Business Journal (2020) 「『楽しい授業=良い授業』という勘違いの弊害と危険性・『笑顔の多さ』偏重の風潮」 https://biz-journal.jp/2020/10/post_187302.html (アクセス日 2020.11.1)
- 4) 大島弥生 (2007) 「大学初年次のレポート作成授業におけるライティングのプロセス」『言語文化と日本語教育』33, 57-64
- 5) 大島弥生 (2017) 「引用を学ぶ基礎の段階の大学生の文章に見られる諸問題」『専門日本語教育学会研究討論会誌』19, 24-25
- 6) 岡田美穂・高橋一榮 (2021) 「教材の開発-引用-」『至誠館大学研究紀要』8, 119-124
- 7) 木曾崇 PRESIDENT Online (2017) 「『訪日客は迷惑』京都を悩ます“観光公害”」 <https://president.jp/articles/-/22664> (アクセス日 2020.10.20)
- 8) 京都市情報館 (2020) 「令和元年(2019 年)京都観光総合調査(概要版)」 <https://www.city.kyoto.lg.jp/sankan/page/0000271655.html> (アクセス日 2020.10.20)
- 9) 桑田てるみほか (2015) 『学生のレポート・論文作成トレーニング改訂版スキルを学ぶ 21 のワーク』実教出版, 14-17
- 10) 河野哲也 (2018) 『レポート・論文の書き方入門 第 4 版』慶應義塾大学出版会, 77-78
- 11) 佐渡島紗織ほか (2020) 『レポート・論文をさらによくする「引用」ガイド』大修館書店, 8-12
- 12) 二通信子・佐藤不二子 (1999) 『留学生のためのレポートの文章』凡人社, 25-29
- 13) 松浦照子ほか (2017) 『実践日本語表現短大生・大学 1 年生のためのハンドブック』ナカニシヤ出版, 65-69
- 14) 渡邊淳子 (2015) 『大学生のための論文・レポートの論理的な書き方』研究社, 76-77